

武藏野日曜集会

新生
——ヨハネ伝第3章1～15節——

小池辰雄

1994年4月17日

人あらたに生まれずば 聖靈を受けなければ 水と靈とによりて生まれずば 新生 キリスト
と一如の世界 永遠の生命

【ヨハネ3・1～15】

¹ここにパリサイ人びとにて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰つかさなり。
²夜イエスの許もとに來りて言う『ラビ、我らは汝の神より来る師なるを知る。
 神もし偕ともに在さずば、汝が行うこれらの徵は誰もなし能わぬなり』³イエス答
 えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見
 ること能わず』⁴ニコデモ言う『人はや老いぬれば、で生まるる事を得んや、
 再び母の胎に入りて生まるることを得んや』⁵イエス答え給う『まことに誠に
 汝に告ぐ、人は水と靈とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず。⁶肉
 によりて生まるる者は肉なり、靈によりて生まるる者は靈なり。⁷なんじら
 新あつたに生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。⁸風は己かかが好むところに吹く、
 汝その声を聞けども、何処より來り何処へ往くを知らず。すべて靈によりて
 生まるる者も斯のかかごとし』⁹ニコデモ答えて言う『いかで斯る事どものあり得
 べき』¹⁰イエス答えて言い給う『なんじはイスラエルの師にしてなおかかる
 事どもを知らぬか。¹¹誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見
 しことを証す、然るに汝らその証を受けず。¹²われ地のことを言うに汝ら信
 ぜずば、天のことを言わんには争いかで信せんや。¹³天より降りし者くだ、即ち人の
 子の他には、天に昇りしものなし。¹⁴モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人
 の子もまた必ず挙げらるべし。¹⁵すべて信する者の彼によりて永遠の生命を
 得ん為なり』

●人あらたに生まれずば

¹ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰つかさなり。

「ニコデモ」というのはパリサイ派の親玉みたいな人で、いわゆる衆議所の委員の中の委員長というわけだ。「宰つかさ」と書いてあるのはそのことです。



²夜イエスの許に來りて言う

「夜」に來たのは、キリストの所へ行くと自分がユダヤ教の異端者みたいに思われるものだから、それで夜みなに分からぬよう來たわけです。

『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る。神もし僭に^{とも}在さずば、汝が行うこれらの徵は誰もなし能わぬなり』

キリストに向かつて、いきなりこんな説明的な事を言うのはおかしくらいです。少し観念的な信仰だ。もつたいぶつて語つてゐるわけです。簡単に

「あなたには降参します」

というような言い方をしなければ本当ではない。これがニコデモらしい言葉だ。

³イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず』

ニコデモは「あらたに生まれ」てない。だから、キリストが单刀直入にいきなりやつつけたわけです。「あらたに」という言葉は「上から」とも訳せる言葉で、

「上から生まれなければ、靈界から生まれなければ」

ということ。我々が自然に生まれたことは地的なことですが、

「天界から生まれなければ、靈的誕生をしなければ、上から生まれなければ神の国を見ることができない」

ということです。全くそのとおりです。モーセから始まつてゐるところの旧約の世界では、この

「新たに生まれる」

ことができない。ただ、有名な預言者たちは、靈界から生まれるような、靈的な祈りの世界を受けてゐるから、彼はある意味において「新たに生まれる」の先駆者たちだつた。アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤといふいわゆる文字で書き残した預言者達です。

私なんかも内村鑑三先生の群れにいたころは、まだ新たに生まれていなかつた。気持の上では、新たに生まれたかの如き氣持でいましたけれども、本当の意味で新たに生まれるのは、聖靈を受けなければ新たに生まれることはあり得ない。無教会信仰では聖靈のバプテスマということは聞いたことがない。

「十字架、十字架」

とばかり言つて、キリストの十字架の贖いだけが無教会信仰の根幹だつた。十字架の贖いは土台ですけれども、それから聖靈にこなればダメなので、キリストの直弟子たちはペシテコステでみな聖靈を受けてゐる。

「祈つてまつていろ、そうしたら、お前たちは聖靈を受けて新しく生まれるぞ」

今的一般の教会でも、本当に聖靈を受けて新たに生まつてゐるクリスチヤンが一体どれと、キリストは預言されておられる。



くらいいるか、というようなわけです。あいかわらずダメなわけです。聖書の研究ばかりしている。研究でもつてその世界に入れない。これが

「人あらたに

上から、靈界から生まれなければ、靈的誕生をしなければ、聖靈を受けなければ

ということになるわけです。十字架止まりではダメだ。キリストの弟子たちも、ペテロも

聖靈を受けるまではダメなんだ。

●聖靈を受けなければ

使徒行伝1章に、

「¹テオピロよ、我さきに前の書^{ふみ}をつくりて、

「前の書」とはルカ伝のことです。

凡そイエスの行いはじめ教えはじめ給いしより、²その選び給える使徒たちに、

聖靈によりて命じたるのち、

「聖靈によりて命じた」と書いてある。

挙げられ給いし日に至るまでの事を記せり。³イエスは苦難^{くるしみ}をうけしのち、

十字架のことです。

多くの慥^{たしか}なる証をもて、己の活きたることを使徒たちに示し、四十日の間、しばしば彼らに現れて、神の国のこと語り、

これは復活のキリストです。

⁴また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。⁵ヨハネは水にてバプテスマを施しが、汝らは日ならずして聖靈にてバプテスマを施されん』

ちゃんと靈界のキリストがそう言つていらっしゃる。それから本当のことが始まるぞ、といふわけです。

⁶弟子たち集れるとき聞いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか』⁷イエス言いたもう『時また期は父のおのれの權威にうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。⁸然れど聖靈なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』（使徒1・1～8）

聖靈を受けなければ証人になれない。キリスト者は、キリストの証し人というのは十字架を土台にした聖靈を受けなければダメだと、キリストがはつきり言つてらつしやるわけです。ニコデモなんてのはダメなんだ。

「人あらたに生まれば



天から生まれなければ、靈界から生まれなければ、聖靈を受けなければ、
神の国を見ることはできない」ということです。

●水と靈とによりて生まれば

ニコデモはあいかわらずユダヤ教なんです。だから、とんでもないことを聞いている。

⁴ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争いかで生まる事を得んや、再び母の胎

に入りて生まるることを得んや』

こういうばかなことを言つてゐる。

⁵イエス答え給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と靈とによりて生まれば、神の国に入ること能はず。

「水」というのは悔改くいあらためのことです。洗礼のヨハネによる悔改のバプテスマ。悔改めて

「自分はまちがつていた」

と降参して、それから今度は聖靈を受ける。「水と靈」とはそういうことです。悔改をして、それから聖靈を受けなければ、本当に生まれたことにはならないので、神の国に入ることはできない。神の国の資格はそういうことだという。クリスチヤンは神の國の人なんだけれども、それが本当に神の國の人であるかということです。何もひとのことを言う必要はないけれども、キリストに

「まだまだだ」

と言われてしまう。それだけはつきりしてゐる。

「水と靈」とは、悔改とキリストの靈のこと。聖靈はキリストの靈です。キリストを抜きにして「聖靈」なんて言つたつてダメです。へタするとサタンの靈と切り替わつてしまふ。キリストの靈を受けるときには——悔改という姿は平伏ひれふしです——全身的な平伏し、魂が降参している姿。平伏しの姿が私が言うところの「無」です。我が無い世界です。

⁶肉によりて生まるる者は肉なり、靈によりて生まるる者は靈なり。

「自然の生命は、自然の生まれかたはどこまでも肉だ」と。「肉」とはこの世的ということで、現世的、現世中心で、神中心でないこと。現世中心、自己中心が「肉」ということです。

昨日、三谷隆正という人の本を読んでいたら、

「汝自身たれ」

と書いてあつた。英語でいうと、「ビー ザイセルフ（ユアセルフ）」という。「汝自身たれ」とは素晴らしいことだ。

「人の顔はみなそれぞれ違う。神さまは一人一人を絶対的な存在として造つた。人真似をする必要はない。ところが、日本人はとかく人真似が多くてこまる。人真



似は要らん。自分自身であれ

と書いてます。これはヘタするといわゆる自我主義になる。自我主義ではダメなんだ。

「汝自身」とは、どこまでも神さまから賜りたる存在、お預かりの存在です。けれども、それはその人らしさがある。自分らしさをなくしたらダメだ。その人らしさという、いい意味の個性だ。「個性をはつきりもて」ということ。ドイツ人は個性が、自意識が強い。自意識がヘタすると、いわゆる自我になつたらいかんけれども。個性は使命的生存、みな神さまから使命を受けとつてている。一人一人はみな使命的生存です。人のため、世のため、国のため、世界のために尽くす使命をもつていて。それが本当の個性です。個性の自覚は、使命的存在であることを自覚しなくてはいかん。これは大事なことです。

これは正に使徒なんだ。みな使徒なんです。「使徒行伝」というけれども、我々はみな使徒なんです。「使徒」というのはいい言葉だ、使わされた者、使わされた徒、天から神さまから派遣された存在。キリストの使徒たち。我々クリスチヤンはみな使徒なんだ。

●新生

悔改め平伏して、聖靈を受けたときに、これは新生となる。

「人あらたに生まれねば」

とは、

「ひと天から生まれなければ、靈界から生まれなければ、靈的誕生をしなければ」ということです。それが新生です。天生でもいい、天から生まれる。これが、

「人は水と靈とによりて生まれねば、神の国に入ること能わず」

ということです。

十字架の前で赦されたから悔改める。人間的な主観的な悔改だけではダメだ。十字架の贖罪を受けとるから、本当に贖罪を受けとれば、そこには今度は聖靈がくる。ところが一般は「十字架、十字架」と言ってばかりいて、さっぱり聖靈の世界にこない。

「肉」とは、この世的だということ。いわゆる自然的な生まれかたは、どこまでも地的であつて天的でない。神中心でない、人間中心だ。それが「肉」ということ。肉欲という意味ではない。自己中心ということです。ところが、聖靈で生まれた者は、神の靈で、キリストの靈で生まれた者は、これは本当に「靈」である。

⁷ なんじら新に生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。
^{あつた}

天から生まれるということを怪しむなど。

⁸ 風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処より來り何処へ往くを知らず。すべて靈によりて生まるる者も斯のごとし』

これは見ようとしたつて分からぬ。自分で体験するよりか仕方がない。直かに身体で体



験しなければダメです。

私が聖靈を受けたのは阿蘇で手島さんと集会をしたときで、全身しびれたね、
「あつ、これが聖靈のバプテスマだ」

と感じた。そうしたら、自然が光つて見えた。今でもあります。なるほど今までの無教会信仰ではダメだということはつきりした。「信仰、信仰」といつて自分の信仰ばかりを問題にして、ふたことめには「信仰」と言つて、「信仰のみの信仰だ。行為おこないを問題にするな」と、今度は正にそれがみなお題目になつてしまつていて。

ところが、本当の信の世界に入ると、信行、一如になつていて。どんなにその行為が破れたような行為でも一向差し支えない。質的には信と一つである。質的に同じなんだ。これは大事なことです。信と行とが同質なんです。

「信仰してから、それから行為を大いに考えましょう」

なんて、そんな二段構えのことをやつたつてダメなんだ、そんな行為は。実は信するといふこと自身が全身的な内的な行為、靈的行為なんです。「信する」とは、「キリストの中に自分を投げ入れる」ことですから。そして、キリストの存在の一部分となる。

「キリストの存在の一部分となる」

ということを、内村先生がいつか書いていたな。

●キリストと一如の世界

要するに、キリストと一如の世界です。一如的存在になる。こうやつて対しているのではなくて、その中に入つてしまつ。朝露を見ると、太陽で光る。あれは朝露のしづくが太陽と一つになつていて。自然現象を見ていると、そういうことが分かる。みな溶け合つている。ゲーテという人はそういうような目で自然を見ていた人だ。ゲーテという魂は大自らと融合したような魂だから、ああいう偉大な詩人になる。対象的にものを見ているうちはダメなんです、その中に入つて溶けてしまわないと。

「汝が我か、我が汝か」

というような世界です。

私は今「飄ひよう」という字の懸け軸を見ていて、この素晴らしい字をジーッと見て、文字と一つになるような見かたをすると、本当にその字を見ていることになる。ただ外側から筆の使い方がどうだこうだと、そんなことを研究しているうちはダメなんだ。

とにかく、そうなると宇宙的になる。星を見れば星となる、太陽を見れば太陽となる。風は見えない。風は見えないけれども、風と一つになることはできる。海の波を見れば波となる。そういうような柔軟な魂にならないとね。だから、海で波をくぐつて泳ぐのは楽しい。泳ぎも、浮こう浮こうとすると却つて沈む。疲れる。ところが、波に自分をまかせてしまうと楽に



泳げるようになる。

キリストはそういつた神秘的な融合性をちゃんと知つていらつしやるから、こういうことを言われるわけです。

⁸ 風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処より來り何処へ往くを知らず。すべて靈によりて生まるる者も斯の^かことし』⁹ ニコデモ答えて言う『いかで斯る事どものあり得べき』¹⁰ イエス答えて言い給う『なんじはイスラエルの師にしてなおかかる事どもを知らぬか。¹¹ 誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを証す、然るに汝らその証を受けず。¹² われ地のことを言うに汝ら信ぜずば、天のことを言わんには争^{いか}で信せんや。『靈界のことはなおさら分からん。地上の現象すら分からないでしようがないのに、いわんや靈的な現象のことはなおさら分からん』

とキリストが言つてゐる。

●永遠の生命

¹³ 天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。

「人の子」という言い方はダニエル書にある言葉です。「メシヤ」の隠れた言葉なんです。

「¹³ 我また夜の異象の中に觀てありけるに人の子のごとき者雲に乗て來り日の老たる者の許に到りたればすなわちその前に導きけるに、¹⁴ 之に權と榮と國とを賜いて諸民、諸族、諸音をしてこれに^{つか}事えしむ。その權は永遠の權にして移りざらず又その國は亡^{したが}ぶることなし。」(ダニエル7・13～14)

これはキリストの預言です。キリストは「永遠の權」をもつてゐる。キリストの國は亡びない。ダニエル書というのは神秘的な不思議な書です。

「²⁷ 而して國と權と天下の國々の勢力とはみな至高者^{いたかきもの}の聖徒たる民に帰せん。至高者の國は永遠の國なり。諸国の者みな彼に^{つか}事えかつ順^{したが}わんと。」(ダニエル7・27)

靈的天国、それはもう地上から始まつてゐる。だから、我々は亡^{したが}びない。

悪人は地獄に行つて生きる。ダンテがちゃんと書いてゐる。善き魂は天国へ行つて生きる。どつとも死にはしない、生きるんです。地獄で生きたら大変だ、ダンテが書いてゐるように。地獄の靈どもは死のうと思つても死ねない。なお苦しみを受けてゐる。

とにかく、私はまだ読みたい本もいくらもあるし、勉強したいことはいくらでもあるし、百歳まで生きたつて間に合わないね。しかし、年は数えないことにした。幾つまで生きましょうなんて、そんなことは考えない。決して死がないから、考える必要はない。死という言葉は嫌いだ。私には死という言葉はない。

「小池先生はどうとう死にました」



なんて絶対に言つてはいかん。幽靈で出てくるぞ（笑）。

靈的真理のためには絶対に何ものとも私は戦つていきます。その戦いの姿は、いずれ大ききな詩を書きます。この詩を見れば、みなびっくりするから。私の言いたいことは全部、詩の中に告白します。私の魂は烈々たるもので、火のごとしです。どんなに風が吹いても、どんなに雨が降つてもこの火は消えない、この靈火は消えない。

¹⁴モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。
これは十字架のことです。

「蛇を挙げた」

というのは、モーセの荒野でのお呪いだ。

¹⁵すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』

十字架で永遠の生命は来やしない。十字架は贖罪だから。十字架のあとでキリストは復活して、あの靈的なキリストに出てわしたら、そうしたら永遠の生命はくる。

「罪の贖いのために自分は死ぬけれども、甦つて、それから本当に生命を与えるぞ」と。「甦る」という言葉は私は嫌いだ。これは本当に新生、新しい靈生、靈の生命なんだ。本来も靈生なんです。本来、キリストは靈生の靈止だから、このキリストの靈生は十字架に架かつたつて死につこない。復活せざるを得ない。

「一体、復活しただろうか」

なんてことではない。これは復活せざるを得ない。靈生また靈生を顕さざるを得ない。キリストの靈生が十字架でお終いになつてたまるかということです。

キリストの言葉は正直凄い。キリストの言葉を読んでいると私は嬉しくてしようがない。パウロだと時々ややこしくてしようがない、理屈を言うから。ヨハネはわりあいにいい。パウロはもともとユダヤ教にいたものだから、ユダヤ教のくせがちょっと残っている。彼はそれを

「塵芥のごとく思う」

と言つているけれども。キリストの十字架を土台とした聖靈の光で聖書を読みなさいよ。そうしたらもうビンビンくるから、楽しくてしようがないから。ややこしい所はすつとばしたつて構わない。時々ピリッピリッと響く言葉があるから、そういうものをちゃんとサインをひっぱつておく。私は読む本にみなサイドラインを引っ張る。ひっぱつてない本は読んでないという証拠です。サイドラインを引きたくないような本は読まないんだ。本を読めば本と一つになり、自然を見れば自然と一つになる。何でも魂が融合しなければダメです。

